

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	90分
-----	--------------	------	-----

- ・日本で進んでいた「都市化」について、警鐘をならす批評文からの出題である。
- ・本文の分量は昨年度よりも若干減少している。すべて記述説明であり、設問数も五問と変化はみられない。ただし、解答欄の行数の合計は昨年度(13行)に比べ12行とわずかに減少した。
- ・本文分量、記述分量ともに大きな変化はなく、総合的にみて、全体の難易度も、ほぼ例年並とみられる。
- ・昨年度同様、本文は文理共通だが、理系では文系で出題された問五がなく、全四問の出題となっている。

<本文分析>

大問番号	□
出典 (作者)	中井久夫「現代社会に生きること」(一九六四年)
頻出度合 ・的中等	なし
分量 前年比較	分量(減少・ やや減少 ・変化なし・やや増加・増加)
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・ 変化なし ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)
□	随筆	問一	記述式	標準	傍線部の内容を説明する問題。(解答欄2行) 傍線部「かわいらしいもの」という表現が都市化がもたらす醜悪な影響と対比されていることを踏まえる。
		問二	記述式	標準	傍線部の心情を説明する問題。(解答欄3行) 自然を「疎外」する、自然から「疎外」されるの二側面を区別し両者をわかりやすく説明する必要がある。
		問三	記述式	標準	傍線部の内容を説明する問題。(解答欄3行) 前後の文脈から「大地の感覚」の内容を理解し、傍線部全体の説明に組み込んで説明する。
		問四	記述式	標準	傍線部に示された筆者の考えの説明(解答欄4行) 筆者がどのような内容に、どのような理由で「同感」しているのかをわかりやすく説明する。

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・□ではしばしば評論や随筆がとりあげられている。だが、いずれであっても、文章の主題や筆者の主張を全体からの確に把握するとともに、個々の文脈を丁寧にたどって正確に押さえる読解力が不可欠である。
- ・設問のそれぞれがどのような意図をもっているか、その狙いを見極める訓練、その理解に応じた記述の練習を積み重ねておく必要がある。

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	90分
-----	--------------	------	-----

・欠点だらけであっても無駄な時間を一緒に過ごすことができる友人こそ、豊かな生を育むために必要なかけがえのない友だちであることを述べた随筆からの出題。
 ・問題文は比較的読みやすいが、解答に必要な内容を過不足なく読み取り、解答欄に収まるようにまとめるのは容易ではない。また、設問ごとに解答の内容を書き分けるのに工夫を要する。

<本文分析>

大問番号	□
出典 (作者)	『友だちは無駄である』(佐野洋子)
頻出度合 ・的中等	なし
分量 前年比較	分量(減少・ やや減少 ・変化なし・やや増加・増加)
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・ 変化なし ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)
□	随筆	問一	記述式	標準	傍線部の内容説明問題。(解答欄3行) ※傍線部の表現に留意しながら、第1段落～第4段落の内容を踏まえて説明する。
		問二	記述式	標準	傍線部の内容説明問題。(解答欄3行) ※傍線部の表現に留意しながら、第5段落～第9段落の内容を踏まえて説明する。
		問三	記述式	標準	傍線部の理由説明問題。(解答欄4行) ※本文全体の内容を踏まえ、第10段落以下文末までの内容を中心にまとめる。 ※答案のまとめ方に工夫を要する。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

・□は理系の単独の出題であるが、理系の受験生にとって、問題の水準は決して平易とはいえない。文理共通問題□のレベルに対応できるように学習しておきたい。
 ・文章のジャンルを問わず、単に字面を追うのではなく、その主題を本文全体からの的確に把握するとともに、文脈を精確に理解する読解力とその内容を適切に説明する記述力が不可欠である。

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	90分
-----	--------------	------	-----

- ・近世の随筆からの出題であった。
- ・2024年度と同様、解答数は三つであった。
- ・設問構成は2024年度と同じ現代語訳二つと、説明問題一つであった。
- ・和歌は本文に含まれていなかった。

<本文分析>

大問番号	三
出典 (作者)	『玉勝間』 (本居宣長)
頻出度合 ・的中等	出典は頻出
分量 前年比較	分量 (減少・やや減少・変化なし・ やや増加 ・増加) 約520字 (前年約380字)
難易 前年比較	難易 (易化・ やや易化 ・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
三	随筆	問一	記述式	標準	現代語訳。「心す+めれ」の理解がポイント。 (解答欄1行)
		問二	記述式	標準	説明。「かへすがへすいかにぞや」について、筆者は何を疑問に思っているのか、「てにをはのととのへ」と対比しつつ説明する。傍線部の前だけでなく、直後の内容も踏まえることがポイント。 (解答欄4行)
		問三	記述式	やや易	現代語訳。「かたかんべき」の文法的理解がポイント。 (解答欄2行)

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・中世・近世の随筆や歌論からの出題は、京大理系古文の一つの流れなので、随筆や歌論にも慣れておく必要がある。
- ・2022年度の出題を考えると、私家集の詞書や日記などの文章にも慣れておく必要がある。
- ・時には平安時代の作品も出題されているので、多様な時代・ジャンルの文章に慣れておこう。
- ・主語、目的語、指示内容などを考えながら、文章全体の内容を正確に理解する練習を平素からおこなっておくこと。それによって説明問題にも対応できるのである。
- ・本文全体を現代語訳できるかどうか京大理系古文の根本である。現代語訳をする練習がいちばんに望まれる。
- ・今年は和歌が直接設問で問われなかったが、直接問われることもあるので、和歌の修辞、現代語訳、趣旨の説明など、和歌の対策は必ずしておきたい。